

北方文化研究室へ

帰郷した真志保は、登別に住みながら北海道帝国大学（現在の北海道大学）北方文化研究室の嘱託となります。大学に勤務したことで、研究面が充実した時期でした。

1949（昭和24）年には、第3回北海道新聞社会文化賞を受賞します。受賞は、真志保の業績が大きく評価された初めてのものでしたが、賞に満足していなかったようで「もっと大きい賞を取るんだ」と樺太時代のクラス会で話したそうです。

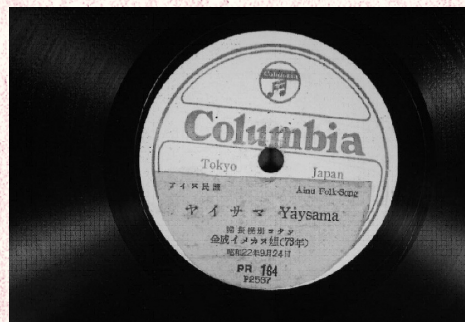


▲1949（昭和24）年、40歳。第3回北海道新聞社会文化賞受賞。中央が真志保。賞は、真志保が進めていたアイヌ語辞典の編さんに対して贈られました。

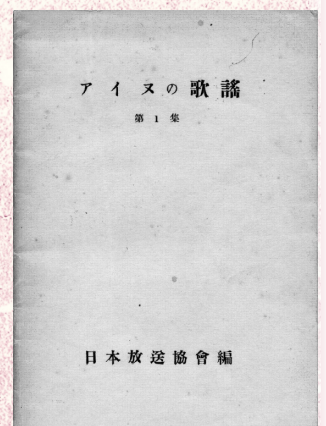
新たな人脈と札幌へ

1950（昭和25）年、長年住んでいた登別を離れ、札幌市にある『大学村』と呼ばれる官舎に転居しました。官舎は粗末な造りであったため病身の真志保には冬の寒さが特にこたえたようです。

しかし、札幌への転居は新たな人脈を作る上で大きな転機となりました。



▲『アイヌの歌謡 第1集』。1948（昭和23）年にNHKの依頼により執筆しました。レコードの中には、伯母金成マツが歌った即興歌であるヤイサマが入っています。



知里真志保年譜

- | | |
|--|---|
| 1909（明治42）年2月24日 知里高吉、ナミの次男として登別に生まれる。姉・幸恵6歳、兄・高央2歳。 | 1942（昭和17）年33歳 『アイヌ語法研究』執筆（1954年博士論文）。 |
| 1915（大正4）年6歳 登別尋常小学校に入学。 | 1943（昭和18）年34歳 樺太各地の調査による論文を発表。豊原女学校を依願退職。北海道帝国大学（現北海道大学）北方文化研究室の嘱託となり、登別へ帰る。 |
| 1921（大正10）年12歳 旭川にいる伯母金成マツに預けられ、北門尋常高等小学校高等科に入学。 | 1947（昭和22）年38歳 同大学法文学部臨時講師となる。 |
| 1922（大正11）年13歳 姉・幸恵死去。故郷の登別尋常高等小学校高等科に転入。 | 1948（昭和23）年39歳 『アイヌの歌謡第1集』。 |
| 1923（大正12）年14歳 北海道庁立室蘭中学校（現室蘭栄高等学校）に入学。 | 1949（昭和24）年40歳 同講師となる。アイヌ語辞典編さんにより第3回北海道新聞社会文化賞を受賞。 |
| 1927（昭和2）年18歳 蓄膿症手術のため1年間休学。最初の著作『山の刀禰・浜の刀禰物語』発表。 | 1950（昭和25）年41歳 登別から札幌の大学村官舎へ転居。 |
| 1929（昭和4）年20歳 幌別村役場に勤めるが、しばらくして退職。 | 1951（昭和26）年42歳 北海道郷土研究会にて『アイヌ語講習会』の講師となる。 |
| 1930（昭和5）年21歳 上京し、第一高等学校（現東京大学教養学部）に入学。 | 1953（昭和28）年44歳 北海道大学で開催された『アイヌ問題シンポジウム』での発表を巡り、研究者と衝突。『分類アイヌ語辞典 第1巻 植物篇』を刊行。 |
| 1932（昭和7）年23歳 アイヌ話話訳文などを発表。 | 1954（昭和29）年45歳 文学博士号取得。 |
| 1933（昭和8）年24歳 東京帝国大学（現東京大学）文学部英文文学科に入学。 | 1955（昭和30）年46歳 『分類アイヌ語辞典 第3巻 人間篇』で朝日賞を受賞。登別でアフルパルの調査。 |
| 1935（昭和10）年26歳 最初の心臓発作を起こす。 | 1956（昭和31）年47歳 『アイヌ語入門』・『地名アイヌ語小辞典』。この年より持病の心臓病で入院を繰り返す。 |
| 1936（昭和11）年27歳 卒業論文の『アイヌ語法概説』を刊行。 | 1957（昭和32）年48歳 HBCラジオ『アイヌ歌謡』を放送。 |
| 1937（昭和12）年28歳 大学卒業。東京大学大学院入学。 | 1958（昭和33）年49歳 北海道大学文学部教授となる。 |
| 1938（昭和13）年29歳 三省堂入社。 | 1961（昭和36）年6月9日 52歳 札幌市の斗南病院にて死去。 |
| 1939（昭和14）年30歳 大学院中退。 | |
| 1940（昭和15）年31歳 樺太（現サハリン）に渡る。樺太庁立豊原女学校教諭、樺太博物館技術員を嘱託。 | |